

## 時を超えて感じるピラミデのころ

ひびの かつひこ  
日比野 克彦

先

日、ペルーはリマから南下した街、ピチャマにある遺跡へ初のテレビ取材が入るということで、撮影に同行した。考古学者でもその存在を知らない人は少ない。

小高い丘があり、頂上からは海が見渡せる。海と山を繋ぐこの地域はどのような思考をもった人々が集まり、どのような動機でピラミデ（ピラミッドのこと）を創造していったのだろうか？

私は人間が感じることは四、五〇〇〇年前と、いや三万年前とだつて大して変わっていないと思つている。世界最古の絵画と言われる洞窟壁画のひとつをベッシユメルというフランスとスペインの国境近くの村で見た時のこと、現物の壁画の前に、時を隔てて同じ人間が立っていた。そこに描かれてある動物の絵は、今の私が見てもその気持ちが変わつてくるものであった。その時、人の気持ちは大して変わっていないと確信した。

考古学は発掘をするアウトドアと、その

発掘したものを分析研究するというインドアとに大別される。遺跡の現場では、形をとどめているものが発掘された地点を記録していく。そのかけらから当時の生活ぶり、社会を推測していく。

物を発見するのが目的ではあるが、そのものがそこにある理由や行為が起きたその同じ場所に居るといふことを感じることが、なによりも大切なななと思う。

この丘に立っていると実に気持ちいいし、ここにずっといたくなる。そんな空気がここに流れている。山の人が海に憧れて出てきたのだろうか？ 海から来た人が航海の記憶をたどっていたのだろうか？ どこからどこにしようとしていたのだろうか？

この遺跡の責任者で、サンマルコス大学、ノルカ教授の研究室生タチアナがわれわれを案内してくれる。

まずは、葦などの植物で編んだ網に石をつめて建物の基礎に使うシクラスというものを見せてくれた。網は石を運ぶのにも便利だし、こうしておくことで免振の効果も

あるという。頑丈で揺るぎないものを目指すのでなく、隙間があるものをつみかさねていくという「間」のある考え方である。植物で出来ているというのに雨の降らないこの地帯では昨日編んだかのように色も鮮やかに姿を現していた。シクラスのデザインは様々で、大きさや用途に応じて編み方を変えているようだ。

エジプトのピラミッドのような数学的に計算された構造物ではなく、緩やかな間を基本としているところがこの特徴である。蟻塚のようにひとあみひとあみの集積が、気がつけば山になっていたのである。何もないところに山は出来ない、なにかそこに気になるものがあつたのだろう。その気になるものとは、そこに来る人々みんなが持っていたものであり、誰かから押し付けられたものではなく、生き物として感じるものだったのだと思う。

それがピラミデという形になっていったのではないだろうか。と丘の上で風に吹かれながら考えたのだ。

1 世界へ●世界から  
時を超えて感じるピラミデのころ  
日比野 克彦

2 みんぱくインタビュー  
須藤健一 新館長に聞く  
知的パワーに満ちた次世代研究者の  
育成が私の使命

8 モノ・グラフ  
国立民族学博物館の  
民族学研究アーカイブズ  
久保 正敏

10 地球ミュージアム紀行  
セントキッツ博物館  
自らの誇りを取り戻す博物館  
五月女 賢司

11 表紙モノ語り  
マルケサス諸島の夕巴  
須藤 健一

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々  
暮らしを彩る曆  
曆の機能と文化  
野林 厚志

15 時論 新論 理想論  
ガザとピラミッド  
古代文明への幻想と現代史  
新免 光比呂

16 多文化をささえる人びと  
ことばに仕事をあたえる  
多言語センター FACIL  
庄司 博史

18 生きもの博物誌  
バイカル湖のご馳走  
伊賀上 菜穂

20 歳時世相編  
旧暦三月三日 海に願う無病息災  
飯田 卓

22 フィールドで考える  
土の中まで変えられない  
川口 幸大

24 みんぱくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう  
次号予告・編集後記

1958年、岐阜市に生まれる。東京芸術大学大学院修了。在学中にダンボール作品で注目を浴び、国内外で個展・グループ展を多数開催するほか、舞台美術、パブリックアートなど、多岐にわたる分野で活動中。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを多くおこなっている。オフィシャルウェブサイトは「CAFE HIBINO NETWORK」<http://www.hibino.cc>